

# 日本大学大学院 国文学専攻論集

## 第17号

〈論文〉

吉行淳之介『夕暮まで』論……………三上 桜（1）  
—幻想と欲望の戯れ—

2021年1月

# 第16号

## 〈論文〉

一九三×年の「新潟」…………… 徳本 善彦（ 1 ）  
—坂口安吾「吹雪物語」小論—

反転する関係性…………… 山中 悠平（ 10 ）  
—『絹と明察』における彦根という〈場〉から—

# 吉行淳之介『夕暮まで』論

— 幻想と欲望の戯れ —

三 上 桜

はじめに

吉行淳之介の『夕暮まで』は、第一章にあたる「日暮れどき」(のちに「公園で」に改題、『文藝』一九六五年七月)が発表された後、最終章の第七章まで約十三年にわたって断片的に発表され、一九七八年に新潮社より単行本が刊行された。

本作の視点人物は、四十四歳で妻子のある佐々という男性で、彼はあるパーティーで二十二歳の江守杉子と知り合うが、処女でいることに拘る彼女に興味を持ち、肉体関係を結ぼうとする。杉子は肉体的な触れ合いは許しても最終的な交接は断固として避けながら、二人は繰り返し関係を保持していた。二人の関係が一年半経った頃、杉子と呆気なく交接の形になってしまった佐々は、彼女に若い男の影を感じ取りながら、自分と離れて「家庭をつくれればいい」と告げて彼女との関係性を終わらせようとするところで物語は幕を閉じる。『夕暮まで』は当時

四十万部売れてベストセラーとなり、ここに描かれているような中年男性と若い女性の組み合わせを指す「夕暮れ族」という言葉は流行語となった。

本作は、一九七八年に「全委員が異口同音に推薦」<sup>①</sup>して第三十一回野間文芸賞を受賞しただけでなく、『文藝』十二月号の優秀作アンケートで最高得票を集めるなど年間ベストワン作品の評価を獲得し<sup>②</sup>、文壇でも高い評価を得た。野間文芸賞の選評で、吉行の小説世界の「資質を凝結したような小説」<sup>③</sup>と評われているように、これまでの吉行文学作品のいわゆる(娼婦もの)との関連性からも評価されている。文庫本の解説で川村二郎も、この小説テクストを「一篇のボルノグラフィ」として読めるとしていることから明らかなように、そうした傾向は、男性の欲望を喚起する女性像が描き込まれているという点で、これまで吉行がフェミニズム批評において批判されてきたこととも繋がってくる。吉行は「女の通」と言われていたため

に、「吉行を読めば、女がわかる」と思い込まれ、そこに描かれる男性に都合の良い女性像が「ほんとう」だと信じ込ませてしまうという「性幻想をまき散らかした戦犯」として糾弾されてきた。『夕暮まで』についてもそのような批判と共通する立場として、男性を上位とする「一方的な上下関係」、あるいは男性が「その（引用者注：杉子の）抑圧を強化し、それを（処女）」という記号的な意味性の中に再回収しようとしている「関係が描かれていることが指摘されている」。

たしかに本作が、佐々だけに内的焦点化しながら、杉子を佐々及び男性読者の欲望を喚起するセクシユアルな存在として描き出している限り、吉行文学の「娼婦もの」として括られ、男性による一方的な女性の囲い込みと批判されても仕方がないだろう。

しかし一方で、河野多恵子が「これまではとかく作中の女性に男性との拮抗を許さなかつたように思われる」吉行作品の中で、「この長編の男女には拮抗感が漲つてい<sup>6</sup>」ると述べているのは注目に値する。二人の関係の拮抗性については、たとえば江藤淳が、「女があらゆる淫蕩な行為に耽りながらも男との正常な交接を「拒否」することができ、そのような女に対して男が、自らの欲望を「抑制」することにながしかの美的自己満足を覚えることのできる状況である」と指摘し、男女双方の欲望の質を吟味している。さらに石原千秋は佐々と杉子が共同して「処女（ここ）を楽しんでいる」ことを分析している。このように、この小説テクストには二人の関係性に双方向的な欲望のぶつかり合いを読み込むことが可能であると考えられる。た

だ、すでに触れたような本作の性質や同時代の評価もあり、これまで「処女」に執着する佐々の欲望は論じられてきたものの、杉子の欲望は単純に「処女」に拘る若い女性のそれとして論じられることが多く、十分に分析されてきたとは言えない。そこで本稿では、杉子の欲望の形を分析することで、改めて佐々と杉子の関係を捉え直してみたい。

### 一・口癖に表れる願望

杉子の欲望を分析する上で、まず二人がはじめて出会った場面を見ていきたい。「若い男女たちのパーティー」に招かれた佐々は、杉子とその友人である祐子と知り合う。そこで祐子から、杉子が処女であり、「まっ白いウエディングドレスを着て、きれいな結婚式をあげる」というのが口癖であること、そしてこの口癖によって、周りの「男の子が、こわがって近づかない」ことを告げられる。杉子のこの口癖について、石田忠彦は、杉子が「自分の処女であることを「才能」の代わりとして考えていることは確か<sup>7</sup>」で、「処女は杉子にとって明らかに商品である」ことを指摘し、また同じように石原千秋も、杉子にとって処女でいることは「一生の生活を保証する唯一の武器」であり、また「アイデンティティでもあった」と述べている。このように先行論では、杉子の「きれいな結婚式をあげる」という口癖は、結婚をするまで処女でいることに価値を見出し、婚前性交渉を避けたいという杉子の、いわゆるロマンチック・ラブ・イデオロギーを示すものだと捉えられてきた。

ロマンチック・ラブ・イデオロギーは、「恋愛を基盤とする

結婚こそ唯一の正統な男女関係であると見なす、近代に特徴的な考え方」で、「性的な関係を結婚したものと士上のあいだでのみ行なわれるべきものとして婚姻外の性を禁止してきた」<sup>(16)</sup>。本作の時代設定を作品が執筆された一九六〇年代後半から一九七〇年代の間だと考えたとき、日本でこのイデオロギーが高度経済成長期に普及し、この時期に恋愛結婚する人が増え、見合い結婚と恋愛結婚の比率が逆転したことから、杉子は当時の時代状況を反映させた人物像であるように見える。ただ、六〇年代は「純潔尊重と婚前性交容認はともに選択可能なオプショナルな規範としてある」<sup>(18)</sup>、つまり「純潔尊重規範にかつての優位性が失われた」時代でもあり、さらに七〇年代には「結婚と恋愛の分離、つまり結婚しなくても（セックスを含んだ）恋愛を楽しんでもかまわないという意識」が高まっていった。また、この頃日本ではウーマンリブ運動が行なわれ、女性達が性と生殖を切り離す「性の解放」を唱えていた時期でもあった。ここから、彼女の考え方は同時代の若い女性たちの思想と逆行していくような、当時としても古風なものであることがうかがえる。作中に描かれている杉子と同年代の女性たちも、「処女」に固執している女性はおらず、佐々も杉子に「いまだき、古風なことを言うね」と告げていることも、それを示しているだろう。

では、杉子がそのような同時代的に古風な願望を抱えていることの背景には何があるのだろうか。彼女の家庭は「中流の上くらい」で、「身のまわりのものも、人の眼を惹かない趣味のものだが、よく見ると高価そう」である。昨中、佐々が杉子を

家へ送る場面が繰り返し描かれているが、それは「終電車で帰宅したように、杉子は家族にたいして取繕わなくてはいけない」からである。また、佐々と杉子は車内で性的な触れ合いをすることもあるが、自宅が近い時には杉子は彼の誘いを断っている。ここから、石田忠彦が指摘しているように、杉子は「常識的な良家の子女」であり、「処女であるということに対する杉子の観念はその家族によっても守られている」<sup>(21)</sup>ことが見えてくる。家庭環境に植え付けられた思想によって、彼女は強迫観念に囚われるように「きれいな結婚式をあげる」ことを繰り返し唱えていると考えられる。

しかし、その口癖は彼女の欲望をそのまま示していると捉えて良いのだろうか。それを考える上で、佐々が杉子を家へ送る際にトンネルを通る場面に注目したい。これは、吉行が『夕暮まで』の単行本刊行の際、既発表の短編小説「きつね火」<sup>(22)</sup>「群像」一九六六年十月）から挿話を引いて加筆した部分であり、リズムに収まらない吉行の文学表現の特徴を示す象徴的なシーンである。

その先の道の上に、紅い小さな灯が、点々と二列に並んで続いている。(中略) 工事中の場所を示す標識灯で、道の片側がかなりの距離、掘り返されているにちがいない。

「きつね火のようだな」

「そう、きつねのお嫁入りよ」

(中略)

「そうっと、うしろを見てごらんさい。ねえ、はやく」

はしゃいだ声音である。

(中略)

車はまだトンネルの中である。スピードを落し、軀を横に向けて、大きく振向いた。

眼に映ってくるものは、なにも無い。

## （第五章「血」）

この場面で、二人はトンネル内に並ぶ標識灯の光を見ているが、ここで杉子が例えた「きつねの嫁入り」という言葉に目を向ける必要がある。言うまでもなく「きつねの嫁入り」が「数多くの灯火が点滅しながら横に連なって行進する」<sup>28</sup>様を指す言葉で、「行列の火が嫁入りと似ていて実際にはどこにも嫁取りがないから「狐の嫁入り」という」<sup>29</sup>ことを踏まえてみると、そのような形だけの「嫁入り」とは、当然「きれいな結婚式をあげ」たいという杉子の願望をずらすものとしてある。つまりこのいかにも象徴的な場面において、杉子の口をついて出た「きつねの嫁入り」という言葉は、日ごろから口にする杉子の結婚願望が実際は空疎なものであることを暗示すると読めるのである。加えて右の引用のように、トンネルの中で何かを見つけてはしゃぐ杉子に対して、佐々が暗闇の中で「眼に映ってくるものは、なにも無い」ことは、佐々が杉子の欲望の実態を見落としていることも暗示している。別の短編小説から引用され加筆されたこのきつね火についての挿話は、杉子の欲望が、その口癖によって佐々及び読者が認識してきたようなロマンチック・ラブ・イデオロギーに寄り添う結婚だけにあるのではない

可能性を浮上させるのである。次節では、杉子が奥底に抱えた欲望がいかなるものかを詳しく読み解いていく。

## 二．杉子の欲望の形

「処女」に拘り、男性との肉体関係を避けていた杉子は、佐々の前で服を脱ぐまでに二か月かかっており、佐々と性的遊戯を続けるようになって、二人の姿勢が交接の形に近付くと大きな声で拒否の言葉を叫んでいる。ところが、ある日突然、「杉子の唇と舌とが」「巧みな動き」をするようになり、当然それは「佐々が仕込んだものではない」。さらに二人の関係が始まって数か月がたったある日、若い男女の集まりに呼ばれた佐々は、「若い男の頸に杉子が両腕を絡ませ顔を仰向けて、唇を合わせてい」る杉子を見て、「その接吻の巧みさとなまなましさに圧倒されてい」る。つまり、杉子は男性との交接を伴う性行為を拒否しているのにも関わらず、性的技巧に非常に長けていることが分っていくのである。この彼女の不可解な行為はどのような解釈できるのだろうか。

ここで、先行研究でも本作との繋がりが論じられてきた、一九六九年連載の吉行の長編小説『暗室』を解釈の補助線としてみたい。『暗室』は佐々と同じように中年男性である中田と、様々な女性との関係を描いた作品である。その中で、中田と肉体関係を持つ一人としてマキというレスビアン女性が登場する。彼女は初めて中田と旅館で二人きりになった時、男性に触れられると吐いてしまうことを打ち明けている。

一方、『夕暮まで』においても同様に、杉子は佐々と肉体的

に親密な関係を結ぶと吐いてしまう。すでに指摘されているように、この共通性に着目すると、『暗室』のマキと同じように、杉子にもレズビアン影を捉えることが可能なのであり、この解釈にしたがって先行研究では、杉子はレズビアンであることやめる、すなわち異性愛者になるために佐々を利用しようとしたと論じられてきた。この解釈からすれば、杉子の「きれいな結婚式をあげる」という口癖は、彼女が異性愛者になりたいという欲望の現われとして読むことも可能だろう。

たしかに、佐々との性的遊戯の後に嘔吐してしまう様子は、杉子が男性との性行為に拒否反応を示していることと捉えることができ、彼女がレズビアン的欲望を抱いた女性だという読みは妥当であるにちがいない。しかし重要なのは、マキとは異なり、杉子は自身をレズビアン女性であるとは表明しておらず、彼女がレズビアンであるかどうかは作中では全く明示されていない上に、最終的に佐々や別の若い男と性行為にいたっているということがある。そのため杉子の欲望の形を探るには、安直にマキの性欲望と重ねるのではなく、杉子その人の言動を仔細に見ていく必要がある。

『夕暮まで』では佐々と杉子の一年半の関係は要約法で語られ、基本的に二人の性的描写もあまり多くない。そうした中で、とりわけ密に性的な描写がされているのが「スエーデン製のトランプ」をめぐる二人の会話の場面である。小説テクストのこの過剰とも言える部分には、杉子の奥底にある欲望の形が露わになるように思われる。この場面は、二人が初めて出会った場面でも登場した、杉子の友人である祐子が、杉子が男女の性行

為の写真をコレクションしていることを佐々に告げるところから始まる。

その祐子が佐々との話の流れの中で、  
「あら、知らなかったの。おスギのコレクションで有名なよ。男と女のあの写真のことよ」  
と、言ったことがある。

(中略)

内ポケットから出して手渡した写真(引用者注…「スエーデン製」の「外国の男女の露骨な姿態」が描かれたトランプカード)を、杉子は熱心に眺めはじめた。

(中略)

「この写真は好き、これは嫌い」

と布団に腹這いになったまま、左右に選り分けはじめた。

(中略)

しかし、男一人と女二人の組合せの凶柄のものは、迷うことなく、左側に置かれてゆく。

俯せになっている女の上に、その軀の曲線のとおりに貼りついているもう一人の女。さらにその上から覆いかぶさっている大きな男。

黒い女と白い女が、左右から歯を露わにして男の肩を噛んでいる。男の胸から腹の二帯を、硬く縮れた毛が隈なく覆っている。

それらのカードは、杉子が素早く左側に選り分けた。

杉子のコレクションの存在を聞いた佐々は、男女の性的行為が描かれたカードを手渡し、受け取った杉子はそれを熱心に眺め、嫌いなものを右へ、好きなものを左へ選り分け始める。そして杉子は、様々な種類の「男一人と女二人の組合せ」のものを、「素早く」「迷うことなく」、左側、つまり好きな方に置いていく。これを踏まえると、杉子の集めているコレクションというのも、彼女が好きな「男一人と女二人の組合せ」であることが推察できる。

この場面に関連して、さらに第六章の二人の会話部分を引用する。

「この前ね、女の友だちの家に泊ったの。そしたら、その子、レズビアンに興味があったのよ。怖くなっちゃった」

「レズビアンなら、きみが一所懸命守っているものに危険はないだろう」

「……同じ年頃なのに、ひどく慣れてる子って、怖いわ。ぜんぶ自分に委せれば、ちゃんとオルガズムスまで持つていつてあげるなんて言うんだもの」

（中略）

「その子と一緒に住むから、お部屋を借りてくれなくって」

「冗談は困るね」

「本気よ、三人一緒に寝ましょうよ。でもね……」

血の色の昇った顔を見せて横向きになった杉子は、佐々

の軀に両腕を巻きつけてくるよ、

「最初は、あたしとその子が二人でするのよ」

「おれは、どうなる」

「見ていれば、いいじゃない。ね、お部屋借りて」

（第六章「すでにそこにある黒」）

杉子は「レズビアンに興味」がある子を怖いと言いながら、その子と性的関係を結ぶだけでなく、最終的には、佐々と「三人一緒に寝」て、三人で住むことを望んでいる。

従来ほとんど注目されてこなかったこれら二つの場面から見てくるのは、杉子が女性同士の関係ではなく、そこに男性が加わる「男一人と女二人の組合せ」、つまりトリプルの関係性を欲望しているのではないか、ということである。つまり、彼女は単純にレズビアン女性であるというよりも、さらに不安定で複雑な欲望を持つ女性と見なせるのだ。そう考えると、佐々との性的触れ合いの後に嘔吐してしまうという杉子の不可解な行為は、男性との関係が密になるカップルの関係性に拒否感を抱いたがゆえのものだったと解釈できる。

ただ、杉子は己の真の欲望に必ずしも自覚的ではない可能性が高い。彼女が抱えるロマンチック・ラブ・イデオロギーは「異性愛を前提とする」ものであるため、杉子は自身の欲望をあくまでも異性との一対一のカップリングであるのだと信じ込み、己の真の欲望を肯定できない段階にいる。その意味で杉子の口癖は、彼女が持つ異性愛規範に反する欲望を抑え込む言葉になっていると考えられる。しかしそれは皮肉にも、彼女がこの



古風な言葉を繰り返すことで「男の子が、こわがって近づかない」ために、異性愛規範への参入が妨げられているという、ある種の安全弁としても機能していることが分かる。

最終的に佐々と「呆気なく交接のかたちになってしまった」杉子は、「虐められたような表情」をし、「多弁は消え去って、黙りがちに」なった。そして自殺未遂をしたと嘘をついて佐々と距離を取るようになる。杉子のこの言動は、異性と結婚したいはずの自分が、男性との性行為に至っても快楽を感じ得なかったことへの動揺や混乱を示すものと解釈できるのではないだろうか。すなわち、佐々との関係のあと、杉子は自らの複雑な欲望に向き合わなくてはならなかったと考えられるのである。

### 三. もう一人の女性

杉子は「中流の上くらい」にある家庭の常識にしたがつて単婚制の枠組みに入り込むべきだという強迫観念に駆られ、そこに固執しながらも、異性、または同性とのカッピングとは別のトリプル関係への欲望を抱え込んでいると解釈できた。そうした彼女の欲望を掘り下げる上で、作中でトリプルの関係を形成する、もう一人の女性の存在に目を向けてみたい。

そこでまず焦点を当てたいのは、他の章と質を異にする第一章である。第一章は佐々と杉子と思われる人物が「男」と「女」として登場し、「超現実的なイメージ」<sup>28)</sup>が提示され、「夕暮まで」の全貌を巧緻に圧縮させてみせている<sup>29)</sup>章であり、本作で描かれる欲望の構造をとくに象徴的に示していると考えられる。

次の引用は佐々が、自分が見た夢の内容を告げる場面である。

「きみが、誰か知らない女と手をつないで、泣きながら歩いてた。二人とも、黒いブーツを穿いていた。連れの女は、きみを慰めているわけではなく、白っぽい表情をして、ただ手をつないで歩いてる。泣いているのは、きみだ。顔の半分が、潰れた熟柿のように、朱色にぐちゃぐちゃしていた」

しばらく黙ったまま、女は歩いていったが、

「その連れの女つて、背が高く、腫れぼったい目蓋をしていなかったかしら」

「そのとおりだが……」

「佐々さんの見たのは、夢じゃなかったかもしれないよ」  
(第一章「公園で」)

ここで佐々は、夢の中で「顔の半分が、潰れた熟柿のように」泣いている杉子が、「黒いブーツを穿いて」「背が高く、腫れぼったい目蓋」をした「誰か知らない女と手をつないで」歩いていたと語っている。すでに指摘されているとおり、第七章において杉子の友人の祐子が、「背の高い女で、かなり化粧が濃」く、「黒いブーツをはいている」女性として描かれていることから、第一章の佐々の夢の中で杉子と歩く女性は祐子と見て間違いない<sup>30)</sup>。

これはテキスト生成の問題とも関係して論じることができる

だろう。なぜなら、第一章の初出にあたる「日暮れどき」(『文藝』一九六五年七月)で、さきに引用した場面の女性二人が穿いていたのが「黒い長靴」だったものが、単行本化の際に「黒いブーツ」と改められているからだ。つまり作家は『夕暮まで』という長編小説をまとめるにあたって意図的に、第一章に登場した夢の中の女性を祐子と重ねようとしたことになる。そうだとすれば杉子の問題を捉える上で、祐子は看過できない存在ということになるだろう。

杉子は作中で周りの友だちから「あまり友だちのいない」子どもだと言われているが、その杉子が祐子と遊ぶ場面が多いことを考えれば、第一章に象徴されているのは二人の特別な親密さに他ならない。祐子に言及した数少ない先行研究として石田仁志は、祐子の言動をこのように分析している。

彼女(引用者注…祐子)は杉子を佐々に紹介しただけではなく、杉子の「処女」を奪うのに自分のベッドを貸してもいいといい、狂言自殺(と思われる)の片棒を担いで佐々を呼び出しては最後に佐々を部屋に誘ったりして、非常に不可解な役回りの人物であり、園子とは反対に昼の世界できちんと職業を持って自立しているようだが、佐々も祐子をレズビアンではないかと考えたりするように、「結婚」という(制度)からドロップアウトした女という印象を与える点ではみえ子や園子と共通する。

ここで指摘されているように、杉子と祐子は、佐々が二人

のレズビアン関係を疑うほど親密であるのにも関わらず、祐子は佐々に杉子と肉体関係を持つように促したりして、たしかに「不可解な役回りの人物」に見える。ただ、石田は祐子を「結婚」という(制度)からドロップアウトした女として他の女性たちと一括りにすることで、彼女の特異性を見落としているように思われる。

たとえば右の引用でも触れられている、杉子が初めての性行為を行うために自らのベッドを貸そうとする祐子の不可解な言動について、改めて小説テキストの展開を追ってみたい。以下に示すのはその該当箇所にあたる、佐々と杉子が祐子の家を訪れた場面の引用である。

「あら、わたしのベッド貸すわよ」

平静な口調で、祐子が言う。

(中略)

「きみのベッドには、きみが染み込んでいる。そのベッドを使ったら、三人で寝ることになるよ」

(中略)

「結局、きみも巻き込まれてしまうよ」

「巻き込まれるって、ベッドで三人になるといふことね。それでもいいじゃないの」

(中略)

「なぜ、曖昧な形のままにしておくの。そんな(引用者注…杉子が「処女」だという)保証書、はやく破ってしまえばいいのに」

「そうおもうこともあるんだが」

(中略)

「それなら、丁度いいわ、わたしのベッドをお使いなさいな」

「なぜ、丁度いいんだ」

祐子は、曖昧な笑いを浮かべている。

(第三章「傷」)

この引用の最後にあるように祐子は、佐々と杉子が性行為をするのに自分のベッドを使うことが「丁度いい」と言い、その理由を聞かれても「曖昧な笑いを浮かべている」だけでその意図は漠としている。ただ、この「曖昧な笑い」にいたるまでの祐子と佐々の会話にも目を向けなければならぬ。右の引用にある二人の会話からは、祐子は自分の身体の匂いが「染み込んでいる」ベッドで杉子と佐々に性行為をさせることで、自分もそこに「巻き込まれ」、結果として「三人で寝ることになる」ことを期待しているかのように読み取れる。

さらに佐々と杉子の関係における祐子の役割をよく示しているのが、佐々と杉子の密会の様子である。佐々は杉子と会う時は必ず電話で約束を結んで、いるが、杉子の電話番号すら知らず、杉子、もしくは祐子からの電話で呼び出される。なかでも祐子が佐々を呼び出していることが多く、杉子が呼び出した場合でもその場にはいつも祐子がいるのである。このように作中では、杉子と祐子の性的関係が示唆されているだけでなく、杉子と佐々との関係を祐子が媒介していることが見えてくる。

ここまでの分析から、祐子は、杉子と佐々との関係において、さきに述べた「スエーデン製のトランプ」に象徴化されたようなトリプルの関係性に求められる、もう一人の女性として立ち現れてくるのではないだろうか。杉子の欲望の象徴としての「男と女のあの写真」について、この「男一人と女一人の組合せ」だと推察できるコレクションの存在を佐々に教えた祐子は、杉子が三者関係を欲望していることを知っていたことがうかがえる。すでに触れたように杉子の処女を奪うのに自分のベッドを使うように言い、「曖昧な笑い」を浮かべていることも、それを暗示している。そうした解釈からすれば、杉子の「狂言自殺」後、これまで性的関係がなかった祐子の方から、佐々を自分の部屋へ誘うのは、祐子が杉子と佐々を共有しようとしているとも捉え直せよう。

つまり、杉子本人も意識化できていない欲望を祐子だけが認識し、祐子はそれを具現化しようとしていたとも解釈することができるのである。そう考えると、第一章で「泣きながら歩いていた」杉子と、彼女を「慰めているわけではない」寄り添って「ただ手をつないで歩いている」祐子の構図は、葛藤を伴う複雑な欲望を抱える杉子と、真の欲望を教えることなく介在する祐子の関係を暗示したものだつたと考えられる。

さらに、佐々が「若い男」と「唇を合わせている」杉子を見て、「その接吻の巧みさとなまなましさに圧倒され」たシーンでも、祐子はその場にいたことに注目したい。杉子と交接を伴う性行為を行なったとおぼしき「若い男」との関係においても、祐子が介在している可能性があるからだ。そのようにして、『夕暮

まで』という小説テクストには、佐々の性欲と並行しながら、二人の女性の複雑な欲望が伏流しているといえる。

### おわりに

従来、杉子の欲望の形と、その友人である祐子の欲望について詳細に分析されてきたとは言いがたい。本論文ではそれらに焦点を当てることで、これまで見落とされてきた『夕暮まで』の女性たちの欲望を解釈し直してきた。ただ、佐々は「家庭をつくればいい」と言いつて杉子との関係性を終わらせようとしていることから分かるように、最後まで杉子の欲望に気が付くことがない。杉子という女性そのものというよりも、彼女が当時としても古風だった「処女」に拘ることそれ自体に大きな興味があった佐々にとつて、杉子の欲望はあくまでもロマンチック・ラブ・イデオロギーに寄り添い、婚前性交渉を否定することにあるべきなのである。確かにこの佐々は多くの女性たちと不倫関係を結んでいるがゆえに性行為に精通した男性として表象されているが、しかし不倫する既婚者として単純な異性愛規範の中で生きる佐々は、杉子のトリプルという関係性を求めるセクシユアリティに決して思い至ることがない。そのため佐々は気が付かないうちに、杉子の欲望というよりも、杉子と祐子の関係性の渦に巻き込まれていったと捉え直せるのである。

吉行最後の長編作品である『夕暮まで』に描かれているのは、「処女」でありながら成熟していく女性と、それを欲望する「中年男性」の性的な関係性であることは否定できない上に、フェ

ミニズム批評で非難されてきた男性の性幻想が描かれていることは確かである。ただ、本作にはそのような表面的な男女関係や、単純な「処女」の欲望の表象にとどまらず、佐々の異性愛規範を愚弄するかのような、杉子の異性愛的欲望にも同性愛的欲望にも還元できない欲望が描き込まれているといえる。『夕暮まで』は男性の行き場のない欲望を描き出すと同時に、本人すらも自覚的ではなく、葛藤を抱えるような女性の複雑な欲望が描かれている点で、吉行文学の中でも改めて再評価すべき小説なのではないだろうか。今後、本稿での考察を基に、他作品との繋がりがや、吉行文学における女性表象の問題について更に分析検討を進めていきたい。

### 注

- (1) 川口松太郎「吉行淳之介」『夕暮まで』野間文芸賞選評「群像」第三四巻一、一九七九年一月、315頁
- (2) 松崎晴夫「『夕暮まで』をめぐって」『民主文学』第一六二号、一九七九年五月、124頁
- (3) 川口松太郎「吉行淳之介」『夕暮まで』野間文芸賞選評「群像」第三四巻一、一九七九年一月、315頁
- (4) 石原慎太郎、坂上弘、中上健次「読書鼎談 吉行淳之介」『夕暮まで』『文藝』第一八巻一、一九七九年一月)の中で坂上は吉行がこれまで描いてきた「娼婦の世界」が本作にも描かれている、「この作品の中で、黒という言葉をとどめていくと、全部それは娼婦側の存在である女の子が持っている色になっている」と述べている。また中上健次は、杉子を「ホステスみたい」と述べ、娼婦的イメージを持った女性として捉えている。

- (5) 川村二郎「解説」『夕暮まで』新潮社(新潮文庫)、一九八二年五月) 180頁
- (6) 上野千鶴子『女ざらいーニッポンのミソジニー』(紀伊國屋書店、二〇〇一年十月) 14頁
- (7) 上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』(筑摩書房、一九九二年一月) 62頁
- (8) 石田仁志「吉行淳之介『夕暮まで』小論」(『論樹』第十一号、一九九七年十月) 86頁
- (9) 河野多恵子「処女愛における男女の性的拮抗 吉行淳之介著『夕暮まで』」(『波』第十二卷十号、一九七八年九月) 29頁
- (10) 江藤淳「自由と禁忌14続 制度としての文学」(『文藝』第二三卷一号、一九八四年二月) 37頁
- (11) 石原千秋『あの作家の隠れた名作』(P H P 研究所、二〇〇九年十一月) 197頁
- (12) 梶木剛「現代作家の性表現―吉行淳之介『夕暮まで』に就いて」(『国文学 解釈と鑑賞』第四四卷五号、一九七九年五月)、石田忠彦「生む性への恐れ(吉行淳之介論)」(『文学批評叙説』第七号、一九九三年一月)、関根英二「(他者)の消去―吉行淳之介と近代文学―」(勤草書房、一九九三年三月)、石原千秋『あの作家の隠れた名作』(P H P 研究所、二〇〇九年十一月)
- (13) 石田忠彦「生む性への恐れ(吉行淳之介論)」(『文学批評叙説』第七号、一九九三年一月) 62頁
- (14) 石原(前掲) 195頁
- (15) 井上輝子「恋愛結婚イデオロギー」(『岩波女性学事典』、岩波書店、二〇〇二年六月) 488頁
- (16) 山田昌弘『少子化社会―もうひとつの格差のゆくえ』(岩波書店、二〇〇七年四月)
- (17) 高橋重郷ら「第十二回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査―夫婦調査の結果概要―」(『人口問題研究』第五九卷一、二〇〇三年六月)によると、「戦前には約7割を占めていた見合い結婚は、その後一貫して減少し、一九六五〜六九年頃に恋愛結婚と比率が逆転した」ことが示されている。
- (18) 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』(勤草書房、一九九九年四月) 320頁
- (19) 山田昌弘(前掲) 178頁
- (20) 江原由美子『女性解放という思想』(勤草書房、一九八五年十二月)
- (21) 石田忠彦(前掲) 62頁
- (22) 吉行は『夕暮まで』刊行に向けた推敲作業について、「長編としての統一をとるために一晩徹夜しました。(きつね火)を捨て、小説の中の時間を整合し、四百か所くらい手を入れた」(近況『読売新聞』一九七八年四月二十日夕刊7頁)、「あれ(引用者注:「きつね火)」は一応別の小説にして書いているんです。あそこで僕がとっておきたかったディテールは、トンネルをくぐるところだけだった」(対談『夕暮まで』『波』第十二巻八号、一九七八年八月、11頁)と語っている。
- (23) 飯島吉晴「狐火」(『大百科事典4』平凡社、一九八四年十一月) 66頁
- (24) 飛田健彦「狐の夢枕」(『百貨店ものがたり―先達の教えにみる商いの心―』国書刊行会、一九九八年十二月) 58頁
- (25) 永島貴吉『夕暮まで』試論(『現点』第三号、一九八四年四月)、神谷忠孝『夕暮まで』(吉行淳之介) (『国文学 解釈と鑑賞』第五二巻十号、一九八七年十月)
- (26) 井上輝子(前掲) 489頁

- (27) 高橋昌男「原初の血のイメージ」(『文学界』第三二卷十一号、一九七八年十一月) 224頁
- (28) 菅野昭正「純粹関係の夢―吉行淳之介『夕暮まで』を読む」(『文藝』第十七卷十二号、一九七八年十二月) 264頁
- (29) 松本道介『夕暮まで』(『国文学解釈と鑑賞』第五〇卷七号、一九八五年六月) 91頁、春木眞巳「吉行淳之介『夕暮まで』論―杉子以外の「処女」」(『同志社国文学』第五十五号、二〇〇一年十二月) 78頁
- (30) 石田仁志(前掲) 88―89頁

\*本稿における『夕暮まで』の引用は、『吉行淳之介全集』第七卷(新潮社、一九九八年四月)に拠る。

(みかみ さくら、本学大学院博士前期課程)

## 編集後記

『日本大学大学院国文学専攻論集』第十七号をお届け致します。

今年度は新型コロナウイルスの影響により、紙媒体ではなくPDFデータの形で公開することとなりました。例年と異なる形とはなりましたが、今年度もこの論集を無事に刊行できますことを嬉しく思っております。

コロナ禍の中、授業の仕方や研究発表の場が大きく変わり、院生にとっては戸惑いや不安の多い年になりました。思うように研究が進められずに悩んだこともありましたが、先生方や先輩方のご助力を頂き、論文を書き上げることができました。また、本論集のような研究成果の発表の場を頂けたことに心より感謝しております。

最後になりますが、改めて刊行にあたりご協力いただいた皆様、ご指導頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。編集後記にまで目を通して頂き、ありがとうございました。

(三上 桜)

## 【編集委員】

委員長 藤 平 泉  
編集事務 三 上 桜

二〇二二年一月五日 印刷  
二〇二二年一月五日 発行

## 日本大学大学院国文学専攻論集 第十七号

(非売品)

編集兼 日本大学大学院文学研究科国文学専攻  
発行者 主任 藤 平 泉

発行所 〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三一―二五―四〇

日本大学大学院文学研究科国文学専攻

電話 〇三(五三一七)九七〇六

印刷所 株式会社印刷

# Kokubungaku Senko Ronshu

—Theses on Japanese Language and Literature—

No. 17

## CONTENTS

### Articles

Illusions about women that men have in *Yūgure made (Toward Dusk)*

by Yoshiyuki Junnosuke

.....MIKAMI Sakura ..... ( 1 )

Published by

NIHONDAIGAKU DAIGAKUIN

The Graduate School of Language and Literature, Nihon University

Tokyo Japan